

# 令和5年度中学校武道授業（少林寺拳法）指導法研究事業

令和5年度中学校武道授業（少林寺拳法）指導法研究事業〔主催＝日本武道館・少林寺拳法連盟・日本武道協議会、後援＝スポーツ庁〕が6月24日・25日の2日間、少林寺拳法東京研修センター（東京都豊島区）において、研究者7名、研究協力者3名、連盟事務局1名が出席して実施された。

本研究事業は中学校武道必修化の充実に向け、学習指導要領に準拠し、年間8～10時間の授業時間想定で、各武道種目の特性を踏まえた指導計画、指導内容、指導法、評価等について、教育効果の上がる武道授業（少林寺拳法）指導法の研究会を実施するものである。

## ■1日目（6月24日）

開講式では、はじめに主催者を代表して和田健日本武道館振興課長が挨拶を述べた。続いて研究者を代表して高坂正治国際武道大学体育学部武道学科教授が、「少林寺拳法の特性をどのように活かして体育授業ができるか検討し、今後の学校教育の発展につながるような研究事業にしたい」と挨拶を述べた。

開講式終了後、2名の研究者による授業の実践発表を行った。

はじめに中村優一研究者から、中学校における少林寺拳法の授業について、音楽に合わせた基本動作の練習やオリジナルの仮段位取得制度を採り入れて生徒を楽しませ、意欲を高める授業を展開していると報告があった。

次に桑島亜紀研究者から、他校との動画での交流に触れながら、「学校現場では一人ひとりの違いを受け入れる習慣を付けることが大切である。子どもが楽しいと思える授業を誰でも実施できるようになることが求められている」と発言があった。

午後の実践発表では、はじめに池藤仁市研究協力者から、授業で少林寺拳法の特性を出すために、音楽・リズム練習やグループ学習、技をパートごとに覚えていく「分解指導」を導入している。生徒の印象に残るような素材の提供を意識していると報告があった。

次に浅芝春美研究協力者から、授業に採択してもらうための過程として、学校長や行政の担当者に実際に少林寺拳法を行っている生徒の姿を見もらうなどの工夫をしていることや、説明するための詳しい資料を作成していただきたいなどの意見があった。

続いて行われた実践研究では、中島正樹研究者が少林寺拳法が目指す人間像について、「授業では『問題の提示』『課題の提示』『課題解決に向けた行動』『課題解決で得た結果の振り返り』という表現に置き換え、4つのステージで組み立てるとよい」と提言した。

次に小井寿史研究者から、「少林寺拳法で非認知能力を育てられる。日常生活で実感できることを授業に組み込むことで生徒の感情を動かし、記憶に定着させられるのではないかと発表があった。

最後に岡田俊介研究協力者から、授業で少林寺拳法を教えるためのパッケージ作りを進めることや動画教材の活用について報告があった。質疑応答では、動画内に着目すべきポイントの表記があると、初心者にとって親切ではないかと意見があった。



小井研究者による非認知能力チェックリスト確認の様子

## ■2日目（6月25日）

1日目に続いて実践研究が行われ、はじめに安田智幸研究者から総社市内の中学校で授業を実施してもらうための具体的な活動について報告があった。課題として指導者の確保の難しさをあげた。

次に本間慎太郎研究者から、中学校武道授業における導入までのロードマップを視覚化し、現状を把握することが必要ではないかとの提案があった。資料の共有方法として、ホームページを活用することや、各種目の資料データを一覧で見られるような場があると、初心者の武道へ対する関心が高まるのではないかと意見があった。

続いて9月の全国指導者研修会の内容について検討し、①初めて少林寺拳法に関わる参加者が授業を行えるようになるための研修、②行き詰まったときに参考になる情報を得られる場の提供、③途中経過の共有として、講師と参加者の双方向の質疑応答の時間の設定、などを反映した日程表を作成することとなった。

閉講式では中島研究者が講評を行い、全日程を終了した。